



日本女子大学 目白キャンパス再整備

選定理由

【選考委員】
稲山正弘・篠崎 淳音 順二

人間社会学部が目白キャンパスに移転し、全四学部が一つのキャンパスに集結することを受けて計画された創立一二〇周年の目白キャンパス再整備である。

目白通りの青蘭館と不忍通りの杏彩館のアーチ屋根形状は、図書館、百二十年館にも繰り返され印象的なキャンパスファサードをつくり出し、また目白通りを跨いでキャンパスの一体感を増している。

「新しい建物と既存建物に連続性が生まれ、全体が融合され、キャンパスとして一つのまとまりを持ちながら、同時に多様な時間の流れも感じられる、歴史と文化を継承したキャンパスランドスケープとする。」という設計意図に則り、図書館、百二十年館と杏彩館の三つの建物ともボリューム的にキャンパスの

なかで突出せず、開放的な建築計画は、設計者が意図したキャンパス

全体のラーニングコモニ化にも寄り、学生の新たな滞在場所として魅力的なスペースを提供している。特に百二十年館は大きなサンクン状の中庭を持ち、一階の半分以上は半屋外のピロティ空間でキャンパスとながっている。キャンパスのほぼ中央に位置しキャンパス全体に広がっているラーニングコモニズを関係付け、多くの学生の多様な活動のためにキャンパス内の各建物の結節点として学生の人流に活気を与えている。

図書館は従来のような積層型の図書館ではなく、スロープや吹き抜けによって上下階をつなぎ一体的な空間構成となっているが、まだスロープが十分に活用される状態ではなかった。

各建物ともキャンパス内の土地のレベル差をうまく利用しており、特



に百二十年館では一階ピロティ床に旧来の敷地の緩やかな勾配を復元し取り込むことでキャンパス全体を緩やかにつないでいる。

施工面では、図書館と百二十年館は極細シームレス鋼管とフラットスラブの構成で、鋼管柱は二層一節施工で建方精度確保に留意し、継手

溶接部分を見せないようにする工夫をしている。図書館の四周スロープは、蚊取り線香を持ち上げたような形状の三次元にねじれたフラット

スラブで、スラブの室内側端部にH形鋼の逆梁を入れて鋼管柱とブラケットで接合し、外周先端には経年的なクリープ変形を抑制するため

一本ずつ長さの異なる無垢鋼材のバックマリオン材を設置するため、スロープ垂直面(高さ)の精度管理を徹底し、打ち放し精度と美観管理を徹底しているが、三次元にねじれたスラブ上の二重床の施工に苦心が見られる。

環境対応としては、はね出しスラ

ブやヴォールト屋根などの庇効果、エキスパンドメタル日射遮蔽効果など、デザイン上の特徴となる部分の外気負荷や日射負荷を低減し、百二十年館では自然通風の取り入れなど基本的な対応を行っている。図書館では地下二重壁内に地階室内の空調空気を通して、ドライエリアから排出。地下書架の湿度上の問題は起こっていない。

全体としてコンセプトを実現する極力シンプルなデザイン思想と、それに応えるための様々な施工上の工夫が印象的な作品である。



1. 杏彩館1階テラス
2. 図書館内観
3. 図書館夕景

日本女子大学目白キャンパス再整備 概要

- 所在地 東京都文京区目白2-8-1
- 建築主 (学)日本女子大学
- 設計者 (株)妹島和世建築設計事務所、清水建設(株)、(株)佐々木睦朗構造計画研究所
- 施工者 清水建設(株)
- 竣工日 2019年3月15日

- 敷地面積 3,378㎡
- 建築面積 1,759㎡
- 延床面積 6,607㎡

- 階数 地上4階、地下1階
- 構造 鉄骨造



詳細や他の写真などは左記の二次元コードからWebページにアクセスしてご覧ください。

《日建連表彰2023 第64回BCS賞受賞作品》 WITH HARAJUKU / Entō / 大阪梅田ツインタワーズ・サウス、及び周辺公共施設整備 / 大阪大学箕面キャンパス 外国学研究講義棟 / 京都市美術館(京都市京セラ美術館) / シェルター・インクルーシブプレイス コハル / 渋谷 パルコ・ヒューリックビル / 清水建設北陸支店新社屋 / 新宮市文化複合施設(丹鶴ホール) / 那覇文化芸術劇場 なはーと / 日本女子大学目白キャンパス再整備 / Port Plus / 丸紅ビル / ミチノテラス豊洲 / 早稲田大学本庄高等学院体育館